

ちょあ

第 1 0 号

平成 13 年 1 月 弘 報
千 代 田 岳 精 会清水
練水

東陽町
菅村上
耳塚
太田
細井
伊丹
恒山
晴山
昇山
香山
碩山
藤山
常風
平岡
伴
平風
丸の内第一
丸の内第一
丸の内第二
丸の内第二

皆様、明けましてお目出どうございます。西洋流で言えば新世紀（廿一世紀）日本では平成十三年紀元二六六一年の正月、辛巳の新歳です。我国近代国家への夜明けと共に明治三十三年に始まつた波瀾の廿世紀に別れを告げ、今茲に夢と希望、新しい文化の創造を目指す新世紀を迎えました。そして伝統文化の一翼を担う吟界の我等としては「温故知新」を灯として掲げたい。

論語 為政

温故而知新 可以為師矣

嘗々として培つて來た日本の伝統と、必死で闘い習得した物事を

再習、研究して新しい道理、知識を導き出そう。これこそ我等高齢者に課せられた勤めでもあり、チャンスでもある。我等は「しわ

を「笑顔」として大コーラスを開しよう。そして廿世紀最後に日本に漂つた閉塞感に光を投げかけよう。

さて、千代田岳精会百四十名は益々吟を楽しもう。これは又論語に「これを楽しむものにしかず」と言うのがある。努力して何かを

平成十二年度昇伝者
お目出どうござります
(略敬称)「奥伝師範」一名
「奥伝」一名
「中伝準師範」九名
「中伝」一名
「丸の内第一」平岡
伴
平風
常風
丸の内第二平岡
伴
平風
常風
丸の内第二

菅村上
耳塚
太田
細井
伊丹
恒山
晴山
昇山
香山
碩山
藤山
常風
平岡
伴
平風
丸の内第一
丸の内第一
丸の内第二
丸の内第二

幸の 待ち居る如く 初暦
江子

会長 飯田 龍鷹

新世紀文化新らた・温故知新
五・五・二〇〇運動平成十三年度昇伝審査指定吟題
四月廿一日(土曜日)

◇初伝 雪中梅を見る 西教寺を訪う

寺門 広瀬 静軒

中伝

藤原 淡窓

山行 居中

杜 惺窓

短歌 子供らと

岩手山 寅

奥伝 甲斐の客中

萩生 金田一京助

俳句 名月や

高良

俳句 山里の

坂井 一京助

皆伝 四十七士を詠す

杜子角

青山の歌

高启

作譯 水野 豊州

坂井 虎山



教場長廿一世紀メツゼー

「吟楽」吟友よ有難う

副会長 磯田 真風

輝く廿一世紀 新年明けまして
お目出とうございます。

爆竹聲中一歲除
春風送暖入屠蘇

(大意) 爆竹の音がにぎやかにし
て年が明けた。春風が暖気を送
つて屠蘇の中に入り込む心地だ。
※屠蘇は年の若い者から飲むのが
しきたりで、最年長者が飲むのを
藍尾(ランビ)の酒と言う。

さて、東陽町教場は今年で発足

十年目を迎えます、よちよち歩きからアッと言う間、歳月の早さを泌々と感じます。多くの吟友に支えられ感謝々々の心境です。この間師範の資格を取られた生徒も五人と誠に嬉しい限りです。

新しい酒は新しい皮袋にと今年は心氣一転、当教場は氣鋭の新教場長「耳塚昇山」副教場長「武田弘泉」氏に就任戴き新発足し、更に飛躍の年といたします。

吟友諸大兄姉、今年も宜しくご支援下さい。

(東陽町教場長)

新世紀を迎えて
丸の内第一教場長
井手樹風

新春に思う

神田教場長 林吾風

いよいよ廿一世紀の幕明け

輝ける廿一世紀を迎えるにあたり、我々の会も十六回目のお正月を迎えます。仄聞するに昨秋の本部審査の結果、準師範以上の方々が廿三名こち達するとのことで。

が廿三名にも達すること。
飯田会長のもとで呱々の声を挙げた頃には、想像も出来ない事でした。この勢いをもって今年も更なる飛躍の年にいたしましょう。
その為にも、日々の吟を楽しみ、吟友の輪を拡げ、元気に過ごしたいものです。

新しい世紀
丸の内第二教場長 岩崎 泰風

激動の廿世紀が終わり、昨年のミレニアムに続いて新世紀を健康で迎えられた事に、まず感謝したい。しかし我々の未来は決して輝けるものではなさそうだ。

教育レベルの低下、德育の欠落と多くの課題を抱える中「詩の心」を繰り返し学べる教場の意義を感じとり、吟の裾野を拡げ若い仲間を増やせるよう、一層の精進を一世紀の日の出を迎えるに当たり

改めて誓いました。

限られた一時間と言う制限の由でレッスンを重ねてゐる第二教場の皆さん、共に頑張りましょう。

新世紀の幕開けを祝う事ができ、喜び一人です。当教場も発足以来会長・副会長のご薰陶を受け、昨年末で延一七四回の教程をこなして漸く軌道に乗り、今年で満五年目を迎えます。古風な言い方ですが、「長幼の序」「君は川流を：我は薪を：」の心を心として楽しく相親しむ日月を送っています。

各人の価値観は多様ですか、教場での気力に満ちた吟声の中に、夫々が培つて来た年輪が滲み出ており「吟は人なり」の思いを新たにしています。「詩吟は人の心に豊かさと安らぎを与えるものである」確信と誇りを持つて、この輪を拡げてゆければと願っています。本年も宜しくご指導ご交誼のほどお願い致します。

新世紀の決意
ハザマ教場長 鈴木重風

新世紀を迎える、お互いに新たな希望を胸にスタートいたしたいものです。

そこで、こんな提案をし、私自身の決意ともいたします。

この活動の輪を一層広げる
清水教場長 村上 恒山

新年お目出とうございります。
吟のご縁で「ちよだ」の皆様と

詩吟の怖さ

清水教場 湯山 徳次郎

廿世紀最後の千代田岳精会温習会行事で、独吟コンクール（無伝の部）への参加を村上教場長から勧められ、期待に添えないご迷惑かと躊躇しましたが、思い直し菲才を顧みず出場しました。

さて順番が来て登壇し、杜牧作「山行」の吟を開始したところ、最初の「遠く」から調子が狂い、正常に直すべく努力し軌道修正に努めつつ曲がりなりにも吟を続けたものの、節調の歛寄せが結句に及び遂に失速の事態に至りました。洵に慚愧の極みで、つくづく詩吟の至難さ怖さを身をもって体験しました。今回吟題にこの詩を選んだのは、季節の適合と杜牧の詩をよく好んでいたからでした。この度の失敗を教訓として、再度挑戦する時は鍛錬を積み研鑽に励み、平常心で臨みたいと思っています。ご支援の程お願い申し上げます。

二つの刺激

神田教場 福島 趙山

一年近い勉強の総決算!!温習会では次の二点が印象に残った。
第一は独吟コンクール無伝の部

で橋本厚子さんが最優秀賞を獲得し、神田教場が見直された。林吾風教場長は、何時も「追い抜き自由」と宣言している。頑張ればそれがなりの成果も出る。我々にとても自慢の材料となつた。もう一点は五年後の千代田岳精会の夢が語られたこと。五教場ふやし、会員二〇〇名体制を実現、武道館出陣男女揃い踏みを期すといふ。五年後と言えば千代田岳精会発足十周年である。

夢とロマンを抱き、改めて健康に気をつけて一步一步進みたいと自分に言い聞かせた。



四十数年に亘る会社勤めはやつと卒業したが、人生を卒業するにはまだ年月がかかりそうだ。そこで七十の手習いに挑戦「不樂復如何」独眼流で行こうと言う訳でハザマ教場に籍を置いて九ヵ月、此

度温習会に初参加、合吟の先導役を仰せつかり緊張の連続、独吟も調子が出ず、それでも一所懸命に吟じました。百名を越える先輩諸氏の、それぞれに味の有る吟を拝聴し、身も心も洗い流された様な不思議な一日を体験しました。言葉を頂き勇気百倍、今後も大いに楽しみ乍ら勉強したいと思います。本会の運営にご尽力頂いた皆さんに心より感謝申し上げます。

温習会に出席して 東陽町教場 菊地 利廣

岳精会にお世話になり早や二年六ヵ月、温習会への参加は三回目教わる事など多く有意義な会と実感しております。

当日、遠藤精岳先生をお迎えし林吾風氏の開会の言葉でスタート。日頃一人一人懇切丁寧に指導され「当日は自信を持って臨んで下さい」と激励された教場長の言葉が思い浮かぶ。各教場別合吟、独吟発表等諸先輩の立派な吟に触れられた事や独吟コンクールに初参加し緊張と未熟さを経験したこと等良い勉強でした。

飯田会長直接の吟詠指導「おふくろさん」吟詠「芙蓉樓に辛漸を送る」や吟についての教え等心の声で七十年の手習いに挑戦「不樂復如何」独眼流で行こうと言う訳でハザマ教場に籍を置いて九ヵ月、此

吟歴五十年遠藤先生の模範吟詠「秋のうた」と吟道についての教えに重さ、深さを感じ感激!
閉会に当たり、磯田副会長より「お互いの役割意識により会は大盛会に出来た事」と「迎える新世纪の取組みについて」を発表され懇親会は赤根惇泉氏の司会により進行、全教場一体となり廿一世纪の更なる発展に向け会場は盛り上がりました。

温習会の日に感じたこと 丸之内第二教場 田中 香山

事業部の会場準備の為出かける前に、岩崎先生より電話がありました。直前までこんなに心配して下さり、今日のコンクールは頑張らねばと思いました。しかし会が進んで、いざ自分の番になると、普段の力を発揮できれば、など緊張して忘れてしまっていました。

今日は遠藤先生をお迎えして、全員が独吟を披露しましたが、会長の講評では、無伝の人人が上手で有伝は追い越されそうとの事でした、頑張らねばと思いました。

会長の指導吟「おふくろさん」皆さんも想い出して吟じて下さい

平成十二年度岳精流
準師範筆記試験に臨んで
千代田第二教場 稲井 碩山

去る十一月三日、文化の日に奥伝以上及び師範審査試験が実施され、私も準師範を受験。千代田

岳精会より九名、第二教場は田中香山さんと二名。私も飯田会長に勧められ詩吟歴十年になります。

筆記試験と名の付く物は十五年ぶり、前日より些か緊張、当日は五時起床、伊東発二番電車、川崎着八時五二分、会場の「サンワーカかながわ」の受付時間にやっと間に合いました。

宗家はご挨拶で「今日は流統にとつて極めて大事な審査の日であり、毎年十一月三日、文化の日同時に全国一斉に開始します、今年は受験者数三八九名（本部二六三名）今回の最高齢の受験者は九十歳、本当に頭が下がります。病気で入院中の方がタクシーで来られます。今日の係の方は大変でしょうが気配りをよろしく」と。

筆記試験は十時から一時間四十分で問題は五問。勉強会欠席の私は、田中さんに資料を送つて頂きお陰で「桜花」の詩文にアクセントと節調を書き入れる問題以外は正解だと思います。田中さんありがとうございました。午後、渡精華先生の面接試験、午前中の試験答案と修得手帳を見ながら種々質問を受けました。

最後に将来教場を持つて岳精流の発展の為努力するようなど。受験にあたり磯田副会長、岩崎教場長にご指導頂きましたこと心より感謝申し上げます。有難うございました。

「吟縁」奇しくも有りがたし 東陽町教場 耳塚 昇山

平成四年二月五日、当時の千代田教場分教場として開設された東陽町教場の第一期生として入会、足掛け十年が経ち、此度準師範の審査を受けました。

それまで詩吟のことなど夢にも思わなかつたのですが、磯田先生の柔軟な笑顔と気軽なお説いについつられて新会員となりました。

苦労は如何ばかりだったかと今はなつて申訳なく思います。入会当時はまだ現役で、たまたま東陽町社員バーの運営も仕事の一つでしめたので、詩吟の皆さんをお客さんとして誘い込もうという営業上の下心で教場との関わりが深まり、自分も吟にのめり込んでゆく結果となりました。

向上の節目に 清水教場長 村上 恒山

十月早々準師範審査の意向を問われ、時期尚早との躊躇いは有つたが、一つの節目と割り切り、受けさせて頂くことにした、当初、どんな審査か皆目分らず、のんびり構えていたが、その後会長の講習会で出題の傾向が分り、多少の準備も出来たのは幸せだった。

一番の要点は「師範とは何か」を問われることだと思い、自分なりに考え方をまとめておくことにしました。

やがて、林先生が「神田教場」を独立、村上・大槻さんが「清水教場」を、城戸・佐藤さんが「ハザマ教場」を開設するなど当教場から大きな発展がありました。「石の上にも三年」などと言われますが、三年は遙に過ぎて「吟」はいつの間にか我が人生の一部になりました。週一回の勉強も、そして何よりも終わってから酌み交わす吟友との杯に人生のふくよかな幸せを感じる昨今です。

教場開設のおり、飯田会長の書「一吟洗心」の文字とその時の詩吟「歩いてゆけなければ」武者小路実篤作が改めて思い出されます。そしてしみじみと「吟縁」に感謝です。

三月廿四日 岳精流吟詠
平成十三年本部及び
千代田岳精会行事日程

四月廿一日 岳精流吟詠
廿五日 宗家全国研修会
廿九日 コンクール大会
岳精流合祀の碑
(会場後報)
五月十一日 岳精流合祀の碑
六月廿四日 建碑祭及び合祀祭
六月廿六・七日 本部全国吟道大会
(川崎市民文化会館)

八月廿六・七日 特別研修会(熱海)
本部夏期師範
本部全國吟道大会

九月 三十日 奥伝以上及び
宗家全国研修会
宗家全国研修会

十一月三日 師範審査
全國吟劍詩舞道大会
(武道館)

十一月三日 温習会(会場後報)
宗家全国研修会

十二月一日 温習会(会場後報)
宗家全国研修会

又この際にと一念発起?し、教

本の漢詩の主なものを解説書と首つ引きで総ざらえもしてみた。
本審査ではこれに関する問題は出なかつたが、自分自身の知見を見直し、又新知見を得ることが出来大変良かったと思う。
凡人は凡人たる所以で恥ずかし限りだが、向上の節目となつた事は事実で、こうゆう機会を与えて頂き感謝の外はない。

『私の心に残る一詩』その三

丸の内第一教場長 井手 樹風

山行 杜牧

遠上寒山石徑斜 白雲生處有人家
停車坐愛楓林晚 霜葉紅於二月花

「この二月というものは旧暦で今の三月か四月の頃、中国で花といえれば桃の花を指します。」広い講堂に飯田先生の声が響きます。

現在のようにフラットな床の会議室に改造される前の階段式の狭くて堅い固定席、先生の前に小さくなつて畏まつてゐる生徒の数は三・四人。昭和六十年秋、千代田岳精会が教場として発足して半年も経たない頃の風景です。磯田副会長、大熊先生、亡くなつた田中保さん：全員がまだパリパリの現役で五時半になつても仕事が片付かず、仲々揃わない時もありました。そんな時遅ればせに講堂に入りますと、飯田先生がお一人でボツンとコンダクターを弾きながら大声で吟じておられる事も度々



廿五回特別師範研修に参加して
丸の内第二教場 太田 翠山

残暑の中、八月廿日より熱海大野屋で一泊の師範研修が開催され

当日昼過ぎより、宗家のご講義、

でした。

そこで初めて出会つたのが冒頭の結句で有名な杜牧の「山行」夕陽に照り映える楓の紅葉の方が春の盛りの桃の花より素晴らしいと詠んだこの詩が九世紀の晚唐の詩人の作と聞き、すっかり漢詩の虜になりました。

昭和六十二年九月、初めて川崎の本部で昇伝審査を受けました。その時一緒に受けた仲間は総勢十四名、遠藤精岳先生のご担当でした。その時の吟も「山行」、冷汗をかきながら吟じましたが、「止めが甘い」とのご指摘でした。その時つい「飯田先生から何時も言わわれているんです」と答えたところ、「言われていたのなら、その通りにやりなさい」と叱られました。終了後、駅の近くの蕎麦屋で反省会。仲間から日々に冷やかされたのが懐かしく思い出されます。

あれからもう十三年、数々の思い出のこもるこの詩を去る十一月の温習会で吟じさせて頂き、また一つ思出を重ねました。

部門別研修、二日目は宗家、宗嗣先生の吟詠指導、会長体験発表と夕方近く迄、バッヂリのスケジュールで呑気に参加した私は大いに反省した研修でありました。

なかでもご高齢と体調を押しての宗家先生の、熱意溢るご指導には、唯々有難く感動し、男性の合吟の素晴らしさ、懇親会の楽しげた事、子供に戻つてローマ風呂で泳いだ事……、初参加の研修は、想い出の残るものになりました。

来年は、千代田からもっと大勢の参加となり、ぜひ出席したく楽しみにしております。宗家の格言で私の好きな言葉にこれを知る者はこれを好む者に如かずこれを好む者に如かずこれを好む者に如かず

吟も又

楽しむに如かず
これをモットーに、いつ迄も元氣に若々しく、大いに楽しみたいと思います。

『教場だより』

箱根小涌谷莊で秋の吟行会

九月十～十一日、箱根小涌谷莊

で丸の内第二、東陽町両教場合同の一泊吟行会を開催。清水・ハザマ・丸ノ内女子の各教場からも有志の方々にご参加頂き総勢廿九名の大盛会となりました。

定刻三時半開会、司会は耳塚さん。全員の会詩合吟のあと、まず岩崎先生の指導吟、藤野君山「花月吟」は「花」と「月」を対に十個宛てちりばめた美しい七言律詩。

女性の高い声が相応しい吟と言ふことで、最後は女性合吟で締め括られました。次いで丸の内第二その他各教場の独吟発表。磯田先生の「今日は吟行会だから講評なし」のご発言で、全員心も軽くのびのびと日頃の成果を披露。

吉川先生が模範吟「烏衣巷」を朗々と唱われたのに続いて、磯田先生の指導吟、新体詩「青山の歌」頼山陽作、水野豊州訳は今年の師範研修で宗家が直々に指導され、しかも来年の皆伝の昇伝審査吟題に指定されている難曲。それだけに全員真剣に学習、不完全ながらも全員合吟に漕ぎ着ける事が出来ました。その後師範研修初参加の女性三名だけでこの曲にチャレンジ（見事！）

最後に東陽町の独吟発表があつて無事終了。

六時から、赤根さん司会で懇親会、次いでカラオケの競演。

最後には「阿波踊り」の実技指導まで行なわれるなど最高の盛り上がりを見せた一日でした。

(東陽町教場 武田 弘泉)

紅葉狩り吟行会雑感

十一月廿三日、西国分寺駅の開札で飯田会長自らガイド役を買って出迎えて下さった。先着は喫茶店とのこと、覗くとハザマの面々、朝早いのと、足の早さは商売柄? 国分寺跡→万葉植物園→殿ヶ谷戸庭園→貫井神社→小金井小次郎墓→小金井市公民館本町分館へと進む。

国分寺跡は三尺ほどの石垣に囲まれた芝生が広がっているだけで往時を偲ぶよすがないが、一帯は照葉樹林と国分寺崖地の「ハケ」からの湧水が武藏野の趣を濃くし清流はお鷹道なる古風な小径に沿い、暫し行人を慰めてくれる。

「いいナ」「ホットするよ!」溜息が漏れる。万葉植物園では志貴皇子の「岩はしる」を合吟、初めは三だつたが、終わりはキチッド締める。小次郎の墓は五米程の大石塔だが、墓は木陰でひつそり苔生している方が好ましい。

会長の万歩計では一万七千歩と

のこと、フツーと思わず嘆息。

公民館ではリュックの中からピール、酒、焼酎、ブランデーまで並ぶ、早速飲みながら食べながら吟に入る。先陣は駒沢さん「名槍日本号」を黒田節入り、お酒の故もあつてか名調子、湯山さんは道々詠んだ俳句をご披露、酒と吟で盛り上がるうちにアッという間に時間が過ぎ、楽しい一日でした。

(ハザマ教場 羽生田 嘉重)

秋澄むや 武藏野の端に吟競う

ハザマ教場 佐藤 四郎

「武藏野紅葉狩りの抄」

清水教場 湯山 得自樓

秋惜しむ 古刹詣でて

格一の碑 (国分寺)

紅葉狩り あとさきになり

お鷹道 (お鷹道)

きざはしに 立ち遠近の

照紅葉 (殿ヶ谷戸庭園)

紅葉佳し 酒また旨まし
吟の友 (小金井本町公民館)

五泉市吟行会

新潟県のほど中心に位し、わが教場の江口さんの生まれ故郷の五泉市の人達は人柄が純粹で等しく

親切であつた。今年の吟行会は、一年前から教場長と江口さんが相談つて練り上げた計画、果たせるかな素晴らしい限りであった。

十月廿九日生憎の雨模様、一行十三人は車三台に分乗して一路東北自動車道を福島へ、まずは喜多方ラーメン、本場の味。磐越自動車道で新潟県へ、初めは山深い鹿瀬町日出谷の旧村長邸、何とメダカが養殖されその佃煮が珍味のお土産である。

方ラーメン、本場の味。磐越自動車道で新潟県へ、初めは山深い鹿瀬町日出谷の旧村長邸、何とメダカが養殖されその佃煮が珍味のお土産である。

翌日は白鳥の瓢湖(餌づけ時間外で残念!)や地元の名所を巡り、「阿賀野川ライン下り」船頭さんの船唄を楽しむ。さて最終日は嘘のような青空と心地よい山々の緑の中を市役所に五十嵐基市長を表敬訪問(その模様は市報に掲載)農協でお土産、新津市でのお寿司に一同大満足で、広い新潟平野を後にした。

◆板橋 禮介氏(清水・休会中)
平成十二年十二月十二日ご逝去されました。享年七十一歳、謹んでご冥福をお祈りいたします。
(丸の内第一教場 伴 平風)

戦乱の廿世紀は、又アジア・アフリカ諸国が白人の植民地支配の軋から独立した世紀でも有りました。明けましてお目出とうござります。日本の新世紀は物より精神面の豊さを目指す時代だと思いますが、皆様如何お考えでしようか、今年も宜しくご支援をお願い致します

五泉市の馬下温泉に六時半に全員元気に到着、江口さんの知人夫妻、保養センターの皆さんから暖かい歓迎を受ける。一風呂浴びた後、心尽くしのご馳走を頂きながら十三人の合吟が続き、皆さんから万雷の拍手。

五十嵐市長を表敬訪問

